

Society5.0に向けた官学連携による数理・データサイエンス教育とキャリア教育を融合した統計インターンシップの意義と課題 ー岐阜県統計課におけるインターンシップの事例検討ー

田川真紀夫¹⁾・小原一喜¹⁾・益川浩一²⁾

¹⁾ 岐阜県環境生活部統計課（〒500-8570 岐阜県岐阜市藪田南 2-1-1）

²⁾ 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

1. 数理・データサイエンス教育とキャリア教育の必要性・重要性

現代社会では、ICT(Information and Communication Technology)が急速に進化したことにより、多種多様なデータが得られ、膨大なデータが蓄積されている（ビッグデータ）。Society5.0（超スマート社会）といわれる社会においては、そうした様々なデータを処理し、分析することで、そこから新たな知見を引き出し、課題解決を促したり、新たな価値を創造したりすることのできる実践的な能力を、数理・データサイエンス教育を通じて子ども・若者たちに培うことが求められている¹⁾。

一方、子ども・若者たちの育ち・学びをめぐるのは、新規学卒者に対する求人状況の変化、求職希望者と求人希望との不適合の拡大、雇用システムの変化といった「社会環境の変化」、勤労観・職業観の未熟さと確立の遅れ、社会人・職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れ、社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向等「子ども・若者自身の資質等をめぐる課題」、身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向、生活体験・社会体験等の機会の喪失といった「子どもたちの成長・発達上の課題」、職業について考えることや職業の選択、決定を先送りにする傾向の高まり、自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま、進学、就職する者の増加等「高学歴社会における進路の未決定傾向」が指摘されている。そのような中で、職場体験学習・インターンシップを含めた「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す」²⁾キャリア教育の必要性・重要性が指摘されている³⁾。

このように、今日、子ども・若者たちの育ち・学びをめぐるのは、数理・データサイエンス教育とキャリア教育を通じて、益々複雑・多様化する社会の中でよりよく生きていく（Well-being）ために必要な資質・能力を培っていくことが強く求められている。本稿では、岐阜県と岐阜大学の連携・協働のもと大学の正課講義として実施された、数理・データサイエンス教育とキャリア教育を融合した「岐阜県統計課インターンシップ」の事例を報告し、その意義と課題を考究する。

2. 「岐阜県統計課インターンシップ」の概要

（1）開催趣旨

近年、国民の統計調査への理解不足やライフスタイルの変化等を要因として、調査環境の悪化が著しい。岐阜県も例にもれず、調査拒否の増加や統計調査員の不足などの問題が生じている。

このような状況をうけ、岐阜県では若年層を対象に積極的な啓発事業を実施しており、平成23年度から小学校～高等学校向けに統計課職員による出前授業を実施したり、県内の小学校へ「グラフでみるかくふるさと岐阜県」という統計学習の副読本を配布したりしている。平成29年度からは、「岐阜県と岐阜大学地域協学センターにおける統計調査に関する教育の協働推進に係る覚書」に基づき、大学生を対象にした事業として、本インターンシップ事業を実施している。

本インターンシップの趣旨は、地域課題の解決に向けてリーダーシップを発揮できる人材の育成及び統計調査の意義や仕組みを理解し、公的統計データの利活用スキルを身につけるとともに、統計調査のよき理解者・協力者として良好な調査環境の確保に寄与する人材の育成を目指すことである。

（2）「岐阜県統計課インターンシップ」実施内容

実施内容について整理する。本インターンシップは岐阜大学の「地域系インターンシップⅠ」の講義科目の一環として実施されており、実施時期は大学の夏季又は春季集中講座として、4日間の日程で行われる。

前半3日間は岐阜大学での講義や統計分析の実践を行い、後半1日は岐阜県庁において職員と

の交流や取り組んだ統計分析の発表を行っている。表1にこれまでのインターンシップで実施したプログラムの大まかな内容を示す。なお、年度により構成は異なる。

下記内容のうち、データ分析・グループワークによる地域の課題発見とその解決策の提案が本インターンシップの主要な内容である。さらにプログラムの中に統計調査員や県職員との交流を挟むことにより、公的統計に対する理解促進や学生のキャリア意識の醸成に資する内容となっている。

表1 「岐阜県統計課インターンシップ」の内容

プログラム	内容
講義	岐阜県統計課職員により、公的統計の基本的知識や現状、統計から見た岐阜県の現状などについて講義を行い、知識を深める。
データ分析演習	人口などの公的統計データを利用し、Excel を用いたデータ分析の手法を実践を通して学習する。
グループワーク	グループに分かれ、県内の特定の市町村に関するデータ分析を行い、課題の発見とその解決策の提案に取り組む。
統計調査員との交流	統計調査員として活動している方と交流し、統計調査員への理解を深め、人員確保への解決策を考える。
県職員との交流	部次長級を含む県職員と交流を行い、県職員の仕事内容やキャリア形成について意識を高める。
発表会	データ分析演習やグループワークで行った内容をプレゼンテーションにまとめ、発表する。

(3) 令和4年度「岐阜県統計課インターンシップ」の詳細

令和4年度は、以下のようなプログラムで行われた。

開催日時：令和4年 9月5日、6日、8日、9日

開催場所：岐阜大学メディアコモンズ（5日～8日）、岐阜県庁（9日）

受講学生：5名（地域科学部、工学部、教育学部）

実施方法：県統計課は、インターンシップのための講義資料を作成し、講義や演習を行う。

また、当日までの準備として、国の統計制度とその課題をまとめた資料を事前に配付し、学習してもらう機会を設けた。

実施内容：表2「令和4年度実施プログラム」の通り。

表2 令和4年度実施プログラム

9月5日	時間	内容
9月5日	9:30 ~ 10:00	【オリエンテーション】自己紹介、インターンシップの説明
	10:00 ~ 12:00	【演習】公的統計データを活用した資料の作成（1） データの入手、分析及びグラフの作成方法の学習
	13:00 ~ 14:00	【講義】統計・統計調査の基礎、統計調査の現状と課題
	14:00 ~ 16:00	【演習】公的統計データを活用した資料の作成（2） 統計分析の実践演習など
9月6日	9:00 ~ 10:00	【講義】統計から見た岐阜県について
	10:00 ~ 15:00	【演習】公的統計データを活用した資料の作成（3） グループに分かれ、分析資料の作成
	15:00 ~ 16:00	【演習】公的統計データを活用した資料の作成（4） 中間発表
9月8日	9:00 ~ 12:00	【演習】公的統計データを活用した資料の作成（5） グループに分かれ、引き続き分析資料の作成
	13:00 ~ 14:00	【交流】統計調査員と語る会
	14:00 ~ 16:00	【演習】公的統計データを活用した資料の作成（6） 分析資料の完成

9月	9:30 ~ 10:15	【講義】 県の行政組織、公務員のキャリア、服務規程について
	10:30 ~ 11:30	【職場体験】 環境生活部幹部職員との座談会
9日	11:30 ~ 11:45	【職場体験】 議場見学
	13:30 ~ 15:30	【演習】 グループごとにデータ分析の発表、インターンシップの振り返り

(4) 演習プログラムの検討事項

演習プログラムの内容については、年度毎に参加者数や前年度までの成果も踏まえたうえで検討している。本インターンシップの主要内容である地域の課題発見とその解決策の提案については、平成29年度の開講以来、一貫して、地方創生における最も重要な問題である「人口減少について」を課題として与えてきた。

令和4年度は2つのグループに分かれ、それぞれのグループに担当する市を割り当て、分析を行ってもらおうという方式とした。市町村によっては特徴が掴みにくいものもあるため、特徴がはっきりしており、比較的 analysis しやすいと考えられる市町村をあらかじめ選定しておいた(岐阜市、可児市)。本来であればデータ分析を通じて分析対象の市町村を学生自身で選ぶという方法が理想ではあるが、4日間という時間の制約上難しいと判断し、その方式は採用に至っていない。

過去に、個人で1つの市を分析したり、5人のグループで分析したこともあったが、1人1市では、データを分析して資料を作成し、発表準備までをすべて行うには作業時間が不足しがちである。5人のグループでは、学生間の作業量の差が出るといった問題が生じた。そのため、令和4年度は3人以内のグループを複数つくり、各グループで分析を進めるという方法をとった。

< 2市を選択した理由 >

岐阜市：県庁所在地であり、人口及び人口移動数が最も多い、産業構造が他の地域と比較して多様である等。

可児市：岐阜県の中で外国人人口の割合と人口増加率が高い(どちらも県内2位)、製造業が盛んであるという特徴がある等。

3. インターンシップ実施の様子

(1) インターンシップ1日目(会場：岐阜大学メディアcommons)

オリエンテーション

演習：公的統計データを活用した資料の作成

座学：統計・統計調査の基礎、統計調査の現状と課題

初日は、インターンシップの参加者と岐阜県の担当者の自己紹介を行い、インターンシップの日程や目的、プログラムの内容などの説明を行った。

オリエンテーション終了後、公的統計データを利用した資料作成の演習を行った。分析対象として、あらかじめ選定された市町村を題材として、データの抽出と分析グラフの作成までを初日の目標として設定した。

まず、データ分析の全体の流れを確認した後、データ分析の際に使用が想定されるグラフの説明を行った。棒グラフや折れ線グラフ、円グラフなど、学生にも馴染みの深いグラフを取り上げ、2種類のグラフを合わせることで、複数の視点を比較しながら検討できることなどを学習した。

次に、データ分析で使用する Excel の扱い方と、政府統計の総合窓口(通称=e-Stat)や地域経済分析システム(通称=RESAS)などの公的統計データ

表3 データ整理とグラフの作成内容

1	総人口と人口増加率の推移 (1985~2020年)
2	年齢3区分別人口と構成比の推移 (1985~2020年)
3	年齢5歳階級別人口の推移 (1985~2020年)
4	外国人人口と総人口に占める割合の推移 (1985~2020年)
5	国籍別外国人人口 (1985と2020年)
6	出生数、死亡数と自然動態の推移 (1985~2020年)
7	県内県外別転入転出差(1990~2021年)
8	移動理由別転入転出差(1990~2021年)
9	主な移動理由別、男女別、年齢別転入転出差 (2021年)

の入手方法について講義及び演習を行った。今回受講した学生にとって Excel はあまり馴染みがなく、工学部の理系学生であっても、触ったことがある程度の状態であった。今回はデータ分析に必要と思われる最低限の機能を習得してもらうことを目標とし、基本的な四則演算、SUM・AVERAGE といった関数、データの貼り付け・並び替え、フィルタ機能、グラフの作成方法などについて実際に作業をしながらの講義を行った。知らなかった機能や、効率よくデータを整理する手法について、領きながら作業を進める様子が見られ、学生たちにとって有益であったことがうかがえた。一方で、多くの機能について短時間で説明したため、途中作業が追い付かない学生もあり、より使用する機会が多いものに限定するなど、内容に検討の余地が感じられた。

一通りの説明を終えた後、分析を行う市町村に対して、表3の内容でデータ整理とグラフの作成を行う演習を行った。学生たちは、前半の講義で学習した内容を振り返りつつ、グループで相談をしながらグラフの作成に取り組んでいた。下記に学生が作成したグラフの例を示す(図1、2)。

1日目の座学では、「統計・統計調査の基礎 統計調査の現状と課題」というテーマで1時間の講義を行った。この講義では、公的統計の種類、統計法、統計調査員制度、統計調査の現状と課題などを扱い、我が国の統計制度がどのような仕組みとなっているかについて理解を深めた。下記に講義資料の一部を示す(図3、4)。

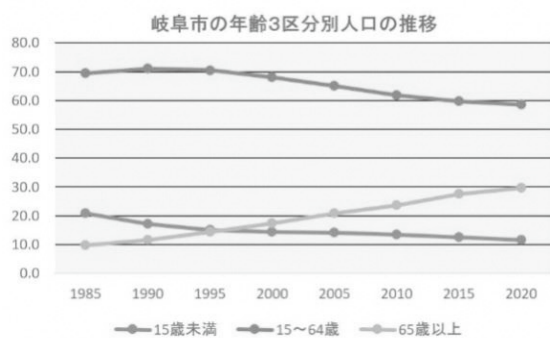


図1 学生作成のグラフ(1)

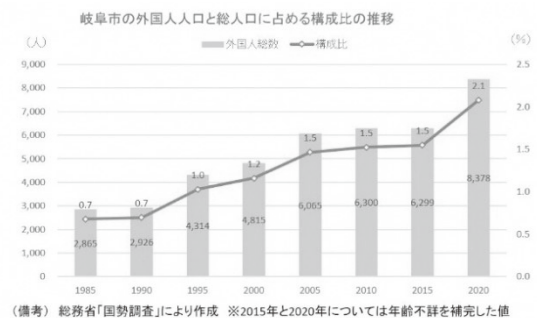


図2 学生作成のグラフ(2)

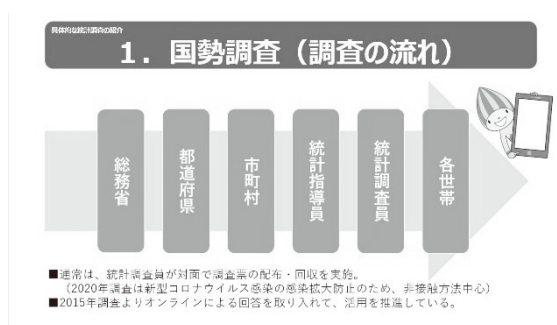


図3 講義資料(1)

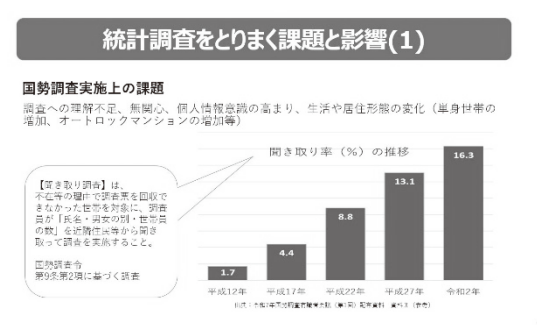


図4 講義資料(2)

(2) インターンシップ2日目(会場: 岐阜大学メディアcommons)

演習: 公的統計データを活用した資料の作成(続き)

中間発表

座学: 統計から見た岐阜県について

2日目は、グループに分かれて担当の市についての分析に入った。今回は岐阜市・可児市の2つの市を取り上げ、それぞれ3名と2名のグループに分かれ、データ分析を行った。

データの分析作業は各グループで進め、統計課の職員が必要に応じて助言をする形で進めていった。当初は個人個人でデータ分析を行い、あまり協動的な活動が見られなかったが、時間が経つにつれ、それぞれが分析した内容を持ち寄って議論するといった動きが見られるようになった。

午後に中間発表の機会を設け、その時点での成果について確認を行った。グループの発表の持

ち時間は5分を目安とし、簡単なプレゼンテーションを行い、それまでの分析状況を報告した。グループの発表後、他のグループとの意見交換や、統計課の職員から助言を聞き、3日目以降の作業の指針とした。

座学では、「統計から見た岐阜県について」というテーマで講義を行った。土地、人口、産業構造等を統計データから見ることで、岐阜県が持つ特徴や、他の都道府県と比較してどのような立ち位置にいるかなどを学んだ。学生たちは、岐阜県に対してどちらかという田舎であるというイメージを持っていたようであったが、人口は都道府県中17位で上位にあること、製造業の生産額が高いことなど、新しい知見を得られたようであった。下記に講義資料の一部を示す(図5、6)。

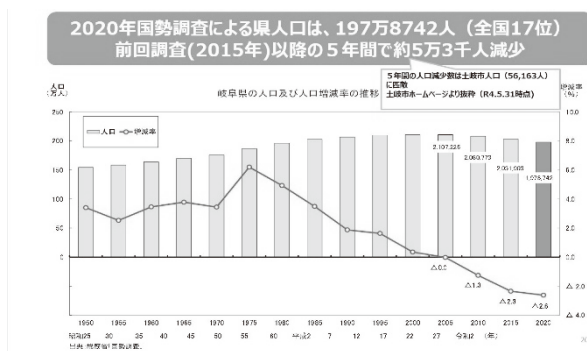


図5 講義資料(3)

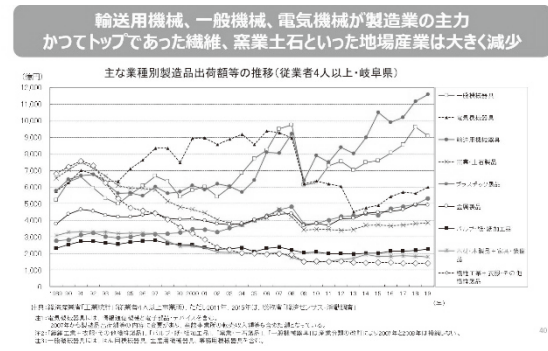


図6 講義資料(4)

(3) インターンシップ3日目(会場:岐阜大学メディアコモンズ)

演習: 公的統計データを活用した資料の作成(続き)
 交流: 統計調査員と語る会

休養日を1日挟み、3日目も引き続きグループに分かれてのデータ分析を進めた。2日目の最後に行った中間発表会で出た意見をもとに、各グループで分析をブラッシュアップしていく作業を行った。統計課の職員は引き続き適時助言をする形で関わり、最終発表会に向けて資料作りを進めていった。

午後には1時間程度、「統計調査員と語る会」を開催した。

実際に統計調査員として活躍されている方に来ていただき、統計調査員の業務、統計調査員になった経緯、調査業務で印象に残っていることなどを話していただいた。その後、学生との質疑応答の時間をとり、交流を行った。学生からは「統計調査員をするうえで必要な資質は何か」「調査業務上の問題点は何か」など、統計調査員の業務に関することに加え、「人とコミュニケーションをとるときのコツは何か」「学生のうちにやっておくべきことは何か」といった、キャリア全般に関わる内容まで様々な質問が向けられ、それぞれ丁寧な回答をいただいた。

(4) インターンシップ4日目(会場:岐阜県庁議会棟)

座学: 県の行政組織、公務員のキャリア、服務規程について
 職場体験: 環境生活部幹部職員との座談会
 県議会議場見学

演習: グループごとにデータ分析の発表、インターンシップの振り返り

インターンシップ4日目は、岐阜県庁議会棟で実施した。

前日の夜間に学生のうち2名が体調不良により、急遽Zoomを利用したオンライン配信をしながらの実施となった。

午前には県職員との交流をメインとした職場体験プログラムである。まず、人事課職員が岐阜県の行政組織、公務員のキャリアなどについて講義を行い、その後、統計課の所属する環境生活部の幹部(次長級)職員との座談会を行った。学生にとって県の幹部職員と交流する機会は稀有なことであり当初は緊張した様子であったが、幹部職員は豊富な経験から公務員としての長期のキ

キャリアについて気さくに話をし、学生も知りたいことを積極的に質問していた。学生からは「公務員として求められる資質は何か」といったキャリアに関する質問や、「環境について岐阜県はどのような施策を行っているか」など、政策に踏み込んだ質問があり、有意義な意見交換を行うことができた。

午後は、グループごとの成果発表会を行った。各グループ 15 分程度で発表を行い、その後、学生同士による意見交換と、統計課長及び岐阜大学地域協学センター長からの講評を行った。各グループの発表内容概要は、以下のとおりである。

<岐阜市分析グループ>

タイトル：若者よ！岐阜に集え

まず、岐阜市の年齢3区分別の人口割合の推移をグラフによって示し（図7）、

1. 総人口が減少している、
2. 65歳以上の人口の割合が増加している、
3. 子どもと働き手の人口の割合が減少している、

という3つの問題点を取りあげた。その後、さらにいくつかのグラフによって、若者が大都市へと流出している現状をとらえ、そのことを課題とした（図8）。

課題解決への方策として、岐阜市に住み続けてもらえる魅力の創出をテーマに、

1. 働きたくなる街、
2. 住み続けたい・愛着のある街、
3. 居住地としての街、

の3つの観点を設定し、それぞれについて解決策を提案した。解決策に関しても、公的統計から産業別の従業者数や一坪あたり家賃のデータを参照し、根拠を持った解決策を示していた。さらに、公的統計だけでなく、自身で探した民間の統計データも用い、解決策を提案することができていた。

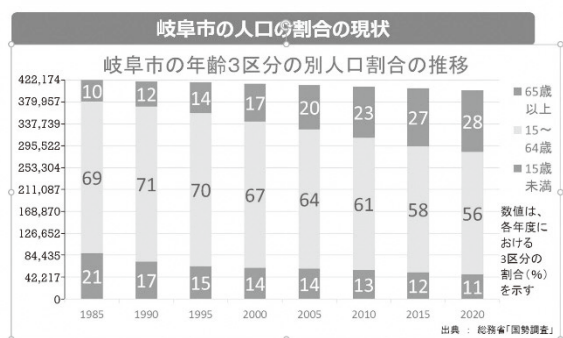


図7 岐阜市分析グループ作成グラフ

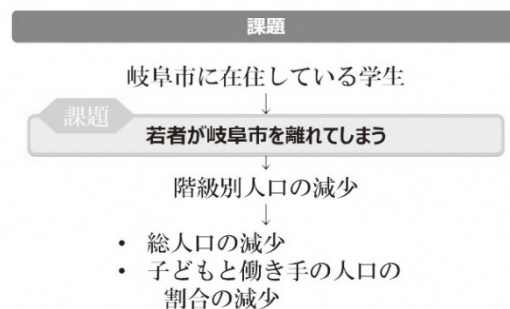


図8 岐阜市分析グループ作成資料

<可児市分析グループ>

タイトル：～外国人の多い町でみんなが住みよいまちづくり～

まず、年齢3区分別人口の推移をグラフによって示し（図9）、次に年齢別外国籍市民数を使って、可児市が他の市町村に比べ外国籍人口が多いことを示した（図10）。また、国籍にも着目し、フィリピンとブラジル国籍の人口が多いことにも着目していた。

可児市が実施したアンケート結果から、外国籍の人が何に困っているかに着目し、課題を「外国籍市民が多い可児市で、共生していくためには」と設定して、

1. 市民の当事者意識の向上、
2. インターネットによる情報の充実、
3. 外国人に対する教育機関の体制整備、
4. 永住者を増やす、

の4つの解決策を提案した。解決策では、永住資格の制度改革や SNS を活用した解決策を提案するなど、固定観念にとらわれない大胆な提案が挙げられていた。

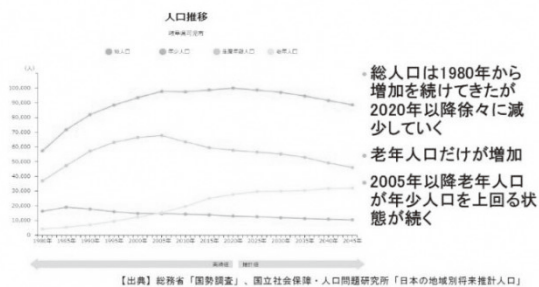


図9 可児市分析グループ作成グラフ（1）

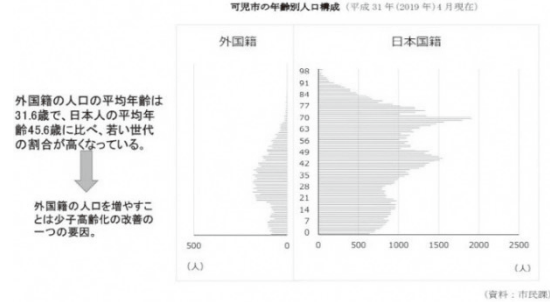


図10 可児市分析グループ作成グラフ（2）

講評では、どちらの発表も統計データという根拠から課題を見いだす流れが整っており、良い評価をいただくことができた。さらに内容を充実させる観点として、理想を設定し、それに近づけるにはどうしたらよいかという「バックキャスト思考」や、関係人口といった着眼点が示された。

最後に、学生たちからインターンシップ全体の感想を述べてもらい、プログラムの修了とした。

4. 成果と課題

本インターンシップの成果と課題を、学生の様子と事後アンケートの結果から振り返る。

（1）データ利活用能力の育成の観点

（アンケートより抜粋）

- ・今まで統計データを使ってグラフを作成することがなかったので、グラフの作り方や大変さを知ることができ、良い機会だった。
- ・e-Stat や RESAS のように、公的統計データが一般に提供されていることを初めて知った。
- ・e-Stat は昔使おうとして、データの場所がわからず使えなかった記憶がある。今回使い方を学習することができて、よい機会になった。
- ・大学の講義で国勢調査のデータを取り、Excel でグラフにし、パワーポイントで発表するといったことをやっているが、今回のインターンシップで、e-Stat の使い方や Excel の技術が向上できたため、将来に向けて役に立つ学びだった。
- ・グラフを作成したりデータを集めたりすることは、以前まで「ただ調べているだけ」と思っていたが、自分で実際にやってみると、想像以上に大変だということが分かった。
- ・多くのデータがある中で、どのデータに注目するべきかが難しく感じた。
- ・パワーポイントを使った資料作りで、今回ほどスライドの多いものを作ったことがなかったので、将来へ向けてとても役立つ経験になった。
- ・資料やデータが沢山あったため、どれを使えば説得力のある展開にできるか、取捨選択が難しかった。
- ・他の地域の分析を試してみたいと感じた。

今回のプログラムでは、学生が Excel や e-Stat などの知識を持っていないという前提で内容を構成した。近年、データ活用能力の重要性は高まっており、義務教育課程においてもデータの利活用が教科指導の内容に入っているが、学生たちは、統計に関することを知識として学んでいても、今回のように実際に自ら分析をしたり、データを探したりという経験は乏しい様子であった。

特に Excel を使用した分析に関しては、1 名を除き全員が初めて扱うというレベルであり、スムーズに扱えるようになるまでにそれなりの時間と補助を要した。e-Stat、RESAS といったデータの出典元についても知っていた学生は一部であり、公的統計データがインターネット上で幅広く公開されていることを初めて知ったようであった。e-Stat などの公開データから統計データを手取りし、グラフ化を通じて分析を進めるといった一連の流れを習得できたことは、学生たちにとって大いに参考になったようである。

今回のインターンシップを通して、公的データの利活用スキルを身につけるといった目的については、ある程度の成果が得られたと考えられる。自分が見つけた課題に対し、様々なデータを取捨選択しながら解決策を考えることができている、今まで断片的であった知識を実際のデータ分析でどのように活かすことができるのか、学生それぞれに学びがあったことが読み取れる。また、グループでの作業としたことで、仲間との交流を通して、自分のデータ分析の問題点や新たなアイデアを見いだす姿もあり、他者と協働して課題にあたる力も伸ばすことができたと考えられる。

課題としては、3日間でデータ分析の基礎から発表資料の作成までを行うのは時間的に厳しく、最終日は予定を延長しての実施となってしまった点が挙げられる。事前学習ができるように資料を用意したり、基礎の講義部分の内容を精選したりすることで、メインであるデータ分析及び資料作成の時間を十分にとれるように改善する必要がある。また、統計課職員の関わり方を事前に十分議論しておく必要があったと考えられる。学生が主体的に考える機会を奪ってしまうこともあるため、学生のデータ利活用能力を伸ばしていく上で、どのように関わるべきか検討していく必要がある。

(2) 統計調査への理解の観点

(アンケートより抜粋)

- ・国勢調査などの公的統計の結果が、実際の政策などに反映されていることを知り、これからの統計調査にはしっかり答えようと思った。
- ・統計データが常に身近で使われていることを改めて実感できた。インターネットでは膨大な量のデータが見つかるが、統計としてあいまいに認識していた事柄について、はっきりと理解することができた。
- ・公的統計が統計調査員という人によって支えられているということを初めて知った。
- ・統計調査員が人手不足に悩まされているということを知った。

学生たちの公的統計に対する事前知識はほとんど無いといつてよい状態で、統計調査員はもちろん、大規模調査である国勢調査に関しても、聞いたことがある程度の理解であった。アンケート結果からは、インターンシップを通して学生の公的統計に対する理解が進んだことが読み取れた。また、3日目に開催した統計調査員との交流を通して、統計調査員に関する理解と興味を深めることができたと感じられた。こうした姿から、今回のプログラムは有効であったといえる。

(3) キャリア教育の観点

(アンケートより抜粋)

- ・実際に県庁で働いている方と話すことができ、漠然と抱いていた公務員に対するイメージが固まった。
- ・他では聞くことのできない貴重な話が聞けたので良かった。
- ・民間企業との違いを考えることができた。
- ・公務員のサービス・倫理規定は厳しく、私生活でも気を付けなければいけないことが大変だと思った。
- ・長く働いている方が考えている価値観や、立場ごとの大変さを知ることができた。
- ・統計調査という仕事については全く知らなかったが、実体験を豊富に話していただき、実際の働き方について具体的にイメージを持つことができた。
- ・人とのコミュニケーションのコツは、どんな仕事に就いたとしても役に立つお話で、いろいろな場所で実践していきたいと思った。
- ・統計調査員の仕事には向き不向きがかなり大きいと感じた。拒否されてしまうことも多いと聞き、メンタル的にかかなり疲れるものだと感じた。
- ・人との会話はどの仕事でも大切なことで、第一印象が大切であったり、気持ちの持ち方を参考にしたいと思った。
- ・人生を通して役に立ちそうなことを教えていただけて、楽しく話をさせていただくことができた。

学生たちにとって、統計調査員や県職員とキャリアについて会話する機会は稀有なことであり貴重な体験となったと考えられる。

本インターンシップを受講した学生は、少なからず公務員という仕事に興味を持っており、人事課職員や県の幹部職員との交流は、学生たちの公務員に対するイメージの醸成に大いに役に立ったことがうかがえた。また、統計調査員との交流では、招待した統計調査員の方が経験豊富な方だったこともあり、統計調査の仕事にとどまらず、それまでの人生の歩みや社会に出てから必要なことといった内容まで話していただき、学生には大いに参考になったようであった。学生たちからも、学生のうちにやっておくべきことや、仕事内容で疑問を感じた点を積極的に質問しており、自身のキャリア形成を前向きに考えることができていた。

課題としては、4日目に行った人事課職員からの講義について、職員のサービス・倫理規定や、処分・懲戒の基準などの内容も扱ったが、学生が求めている内容と少し違っているようであった。学生たちにとっては、具体的にどのような仕事をしているか、職員のキャリアパスがどのようなものか、といったことにより興味があったようであり、事前に学生にどのような内容について聞きたいかのアンケート等を実施し、講義に要望を反映させる等の工夫が必要であると考えられる。

また、今回は新型コロナウイルス感染症対策のために実施していないが、以前は県庁で実施した際は若手職員を招いて共に昼食をとるなど、より近い年代の職員と会話する機会を設けたこともあった。人事課職員や県の幹部職員だけでなく、様々な年代やバックボーンを持つ県職員と交流することで、学生のキャリア意識の醸成により資する内容を提供できると考えられる。

5. 今後に向けて

本インターンシップを通して、データ活用能力の育成、統計調査への理解促進及びキャリア教育という3つの点において、一定の成果が認められた。今後、これまでの実践記録をさらに活かし、インターンシップで伸ばすことができる力を整理し、より良いプログラムを提供できるようにしていくことが重要であると考えられる。さらに、本インターンシップを修了した学生が、将来統計調査へ何らかの形で関わり、健全な統計調査環境の醸成に貢献することが期待される。

注)

1) 文部科学省 web ページ「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (リテラシーレベル)」を参照。

URL: https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00002.htm

最終確認日: 2022 年 9 月 12 日

2) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」平成 23 年。

3) 文部科学省 web ページ「キャリア教育の必要性と意義」。

URL: https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1306818_04.pdf 最終確認日: 2022 年 9 月 12 日

※執筆者の所属は、執筆時のもの。